レジャー志向性尺度によるセグメンテーションとアセスメントの妥当性に関する研究

── 千葉県流山市を事例として ──

土　屋　　薫*

要　約

レジャー行動を発達モデルとしてとらえて余暇診断の際の枠組みとして利用することを想定した「レジャー志向性尺度」に着目すると，レジャー・カウンセリング・プログラムづくりの上で，経験則のみに縛られずにプログラム改善の指針を得ることができる。ただし，最新の先行研究の結果と比較すると，本研究のサンプルでは，「消極型」「平準型」「自己中心型」「自己啓発型」「最適型」という５つのセグメントのうち，「自己中心型」と名付けられるものが特徴的には現れてこなかった。とはいえ，現在のレジャー行動を通事的に位置づけるという狙いは，尺度全体としては有効だと評価しうるので，今後も尺度としての妥当性を一般サンプルで検証し続け，改良を目指すことでその完成度が高まることは言うまでもない。

キーワード：余暇診断，レジャー行動，レジャー・カウンセリング

1. はじめに

レジャー・カウンセリングのプログラムは余暇診断と連動して成り立つものであるが，LDB（Leisure Diagnostic Battery：余暇生活診断テスト）に代表されるような従来のアセスメントツールは，共時的な評価を前提としているため，どうしても対症療法的な展開になりかねない。その点，レジャー行動を発達モデルとしてとらえ，余暇診断の際の通事的な枠組みとして利用することを想定した「レジャー志向性尺度」（佐橋・佐藤 2007 a）は注目に値する。

先行研究においても確認されているとおり，レジャー志向性尺度は，学生サンプルのみならず（佐橋・佐藤 2007a），一般サンプルでも６つの因子構造が確認され，また因子ごとの信頼性係数も下位尺度の内的一貫性がある程度高いものとしてとらえることができる（土屋 2009）。ただ，寄与率の点から見たとき，各因子の順位に関して先行研究間で異なる点が出ており，それがサンプル特性に依存するものなのかどうかについては，今後，他の調査研究の成果を待つ必要がある。また，レジャー志向性尺度によるセグメンテーションに関しても，十分な比較検討がなされているとは言い難い。

そこで本研究では，このレジャー志向性尺度によるセグメンテーションと余暇診断場面での活用に関して検討することを目的とする。

なお用語に関して，本研究においては，余暇とレジャーを同義のものとして捉え，統一的に「レジャー」という語を用いるが，用法が一般化している名称等については，「余暇」という語を用いる。

2009 年 11 月 30 日受付
* 江戸川大学　ライフデザイン学科准教授　レジャー社会学，レジャー産業論

2. 研究の方法

本研究は，平成20年度江戸川大学学内内共同研究にて実施した市民意識調査（千葉県流山市）の質問紙の一部に組み込んだレジャー志向性尺度（一部改定版）の集計結果を用いた。

実施期間は2008年4月15日～30日で，郵送法による質問紙調査として実施した。調査対象者のサンプリングには層化二段無作為抽出法を用いた。手順としては，流山市を自然条件・社会条件に沿って4地域に分け（北部・中部・南部・東部），調査区域の選挙人名簿を用いて地域区分ごとに人口に比例して一定数のサンプルを抽出した（計1,602）。

質問紙全体は，a）流山市について，b）レジャー行動（レジャー志向性），c）メディア接触，d）携帯電話の利用状況，e）パソコンインターネットの利用状況，f）対人関係について（社交性，自己効力感），g）属性，で構成した。

分析に関しては，志向性尺度の反応結果に対して因子分析を行ない尺度の構造を明らかにし，先行研究の結果と比較した。

3. 結果と考察

(1) サンプル属性

回収率は39.1%で，回答者の約40%が男性，約60%が女性で，50歳代・60歳代を合わせると50%弱，ついで30歳代・40歳代を合わせた20%，70歳代の15%となっている。職業では，主婦（家事専業）とつとめ人がそれぞれ25%前後，ついでパートタイム・アルバイトと無職がそれぞれ15%という割合だった。同居家族員数は平均3.07人（SD=1.44）で，2世代で構成される家族が44.4%を占めており，続いて約30%が夫婦のみの二人暮らしであった。

また，80%近くの回答者が持ち家一戸建てに暮らしており，ついで分譲集合住宅が12.4%となっている。さらに居住年数に関しては，20年以上

表1　年　　齢

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳以上
%	8.4	13.1	10.8	22.3	25.3	15.7	4.4
実数	42	65	54	111	126	78	22

表2　職　　業

	農業	自営業	つとめ人	パート・アルバイト	公務員	主婦（家事専業）	学生	無職	その他	無回答
%	1.2	7.4	24.5	14.7	1.8	25.7	2.2	16.7	5.6	0.2
実数	6	37	122	73	9	128	11	83	28	1

表3　同居家族員数

	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	無回答
%	11.8	27.5	26.9	17.9	9.2	4.4	1.4	0.6	0.2
実数	59	137	134	89	46	22	7	3	1

表4　家族構成

	一人暮らし	夫婦のみ	親と子ども人	三世代家族	きょうだいのみ	その他	無回答
%	6.4	29.1	44.4	9.6	0.4	9.4	0.6
実数	32	145	221	48	2	47	3

表5　住まい

	持ち家 一戸建て	賃貸 一戸建て	分譲 集合住宅	民間賃貸 集合住宅	公営賃貸 集合住宅	社宅・官舎・ 寮
%	77.5	2.2	12.4	6.2	0.6	1.0
実数	386	11	62	31	3	5

表6　流山市への居住年数

	1年未満	1〜3年未満	3〜5年未満	5〜10年未満	10〜20年未満	20年以上
%	1.2	4.6	2.8	10.8	17.1	63.5
実数	6	23	14	54	85	316

の割合が最も高く60%を超えていた。しかし，出身に関しては，流山市以外の占める割合が80%を超えていた。このことは，流山市が郊外型のエリアとして開発されてきたことを意味するものと思われる。

(2)　休日の行動範囲

サンプルの自由時間の過ごし方の特徴をとらえるため，休日の施設利用に関して自由筆記で回答してもらい，それをコーディングしたところ，東葛エリア内（ここでは野田市・柏市・流山市・松戸市の隣接4市）の施設利用が9割，柏市・流山市の施設利用が6割を超えており，休日に関して，流山市民はそれほど行動半径が広くないことがわかった（図1）。また，モール・商業施設の利用が過半数を占めており，休日の行動特性が消費行動を背景としていることが明らかとなった（図2）。ただし，レジャー・スポーツ施設の利用や公園緑地の利用といった時間消費型のレジャー活動もある程度の割合を占めており，バランスのとれた自由時間の過ごし方を実践する下地を有しているとも言える。

(3)　レジャー志向性尺度

尺度自体の有効性は先行研究において確認されているが（土屋薫・茅野宏明・マーレー寛子・佐橋由美・佐藤馨 2008），基本等計量と因子分析の結果は表7のとおりである。

その結果，「対人関係志向」「主導性」「利他主義」「活動性」「自然志向」「長期的展望・向上」という6つの因子の因子が抽出されている。学生サンプルによる先行研究では寄与率の最も高い「長期的展望・向上」が，今回のサンプルでは最も低くなっていることが大きな特徴である。これは，持ち家率が80%を超え50歳代以上が65%にも及ぶサンプル属性からすると，当然のことかもしれないが，このようにサンプル属性が大きく変わっても尺度としての一貫性が保持されているところに，診断ツールとして脆弱性を棄却する力が認められる。

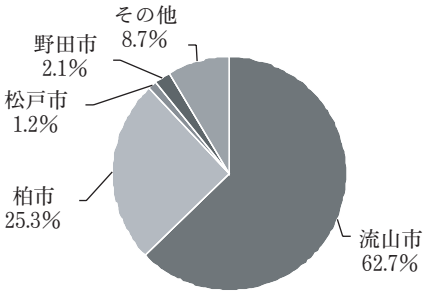

図1　もっともよく行く休日施設の場所

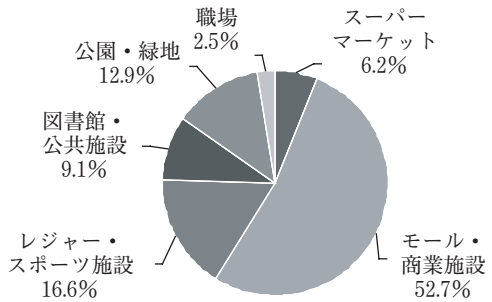

図2　もっともよく行く休日施設

表 7　レジャー志向性尺度の基本統計量と因子分析の結果

旧番号	新番号		質問内容(+)	平均	*SD*	対人関係志向	主導性	利他主義	活動性	自然志向	長期的展望・向上	α
*12	*10	A	誰かと一緒に過ごす	2.27	0.789	0.741	0.124	0.134	0.048	−0.153	0.028	0.752
4	4	B	友達と過ごしたい	2.43	0.827	0.675	0.045	0.096	0.085	−0.050	−0.005	
20	17	B	友人や家族とおしゃべりをしている	2.43	0.836	0.540	0.067	−0.086	−0.026	−0.181	0.054	
2	2	B	出かけたい	2.71	0.849	0.505	0.110	−0.080	0.265	0.036	0.018	
*18	*15	A	ドライブや旅行に出かけるのが楽しい	3.06	0.805	0.473	0.151	−0.001	0.200	0.244	−0.017	
*28	*23	A	私の趣味活動は他の人と一緒にするものが多い	2.34	0.866	0.459	0.126	0.168	0.183	−0.131	−0.030	
*23	*19	A	最初に計画を提案するのはたいてい自分だ	2.35	0.752	0.116	0.802	0.054	0.116	0.040	−0.013	0.775
31	25	B	何かを計画するとき，たいてい自分が中心になって進める役だ	2.26	0.716	0.120	0.708	0.137	0.026	−0.007	0.093	
*15	*12	A	自分が中心になって計画するほうが楽しいし，好き	2.58	0.756	0.198	0.628	0.087	0.067	0.087	0.233	
*7	*7	A	人が集まる場面では輪の中心	2.10	0.769	0.325	0.441	0.100	0.086	−0.043	0.055	
*24	*20	A	自由時間にはできるだけ社会や人の役に立ちたい	2.31	0.781	0.021	0.153	0.719	0.193	−0.003	0.110	0.771
*8	*8	A	人の役に立つことは喜びなので自由時間にはそのような活動を行う	2.00	0.760	−0.025	0.079	0.649	0.124	−0.078	0.097	
32	26	B	積極的にボランティア活動や社会貢献に関わっていきたい	2.34	0.667	0.109	0.079	0.617	0.015	0.058	0.151	
16	13	B	ボランティア活動や NPO 活動など，時間があったらしてみたい	2.56	0.824	0.113	0.013	0.585	0.185	0.131	0.260	
*25	*21	A	体を活発に動かすほうがリフレッシュ（エネルギー充電）になる	2.61	0.836	0.237	0.224	0.182	0.687	−0.069	0.004	0.527
*1	*1	A	体を動かしたい	2.80	0.852	0.264	0.099	0.085	0.644	0.063	0.169	
*17	*14	A	スポーツ，フィットネスにつとめている	2.31	0.914	0.257	0.174	0.126	0.562	−0.020	0.023	
—	28	B	自然は遊び場だ	1.82	0.771	0.045	0.056	−0.090	−0.197	−0.117	0.002	
*11	*9	A	自然の中にいると落ち着く	3.34	0.682	−0.122	0.013	0.046	−0.009	0.639	−0.106	0.623
*27	*22	A	人のいない静かな場所に行きたい	3.00	0.722	−0.236	0.012	−0.049	−0.052	0.603	−0.019	
*3	3	B	旅行するなら自然豊かなところ	3.48	0.654	0.010	−0.066	−0.006	0.114	0.597	0.013	
19	16	B	自然の中でのスローライフにあこがれる	3.12	0.706	0.037	0.135	0.050	0.046	0.341	0.120	
*21	18	B	今は知識や技能がなくても努力すればできるようになると思う	2.24	0.791	0.040	0.127	0.096	0.021	−0.010	0.637	0.579
29	24	B	将来の自分にとって糧となる活動を趣味として行う	2.54	0.746	−0.011	0.087	0.175	−0.019	0.035	0.508	
*14	*11	A	資格取得や技術向上を意識しながら趣味活動をする	1.98	0.810	0.183	0.055	0.134	0.017	−0.190	0.425	
5	5	B	時間ができれば何か学びたい	2.50	0.858	−0.228	−0.038	0.234	0.213	0.130	0.425	
6	6	B	挑戦的で奥深い活動が好き	2.12	0.778	−0.079	0.313	−0.042	0.070	0.027	0.333	
—	27	B	夏の暑い日は木陰で涼みたい	2.59	0.954	0.031	−0.042	0.135	0.205	0.153	0.208	
				二乗和		2.55	2.01	1.97	1.62	1.52	1.42	
				寄与率(%)		9.09	7.45	7.05	5.78	5.43	5.70	
				累　積(%)		9.09	16.54	23.59	29.37	34.80	39.87	

＊1　旧番号は先行研究（佐橋・佐藤 2007a）における項目番号を指す。新番号は本調査における項目番号を指す。
＊2　因子名は先行研究（佐橋・佐藤 2007a）による。
＊3　得点化はA→Bの順に 1→4 点を配点した。項目番号に＊が付されている場合はA→Bの順に 4→1 点を与えた。
＊4　因子分析は主因子法による因子抽出の後，バリマックス法による回転を実行した。

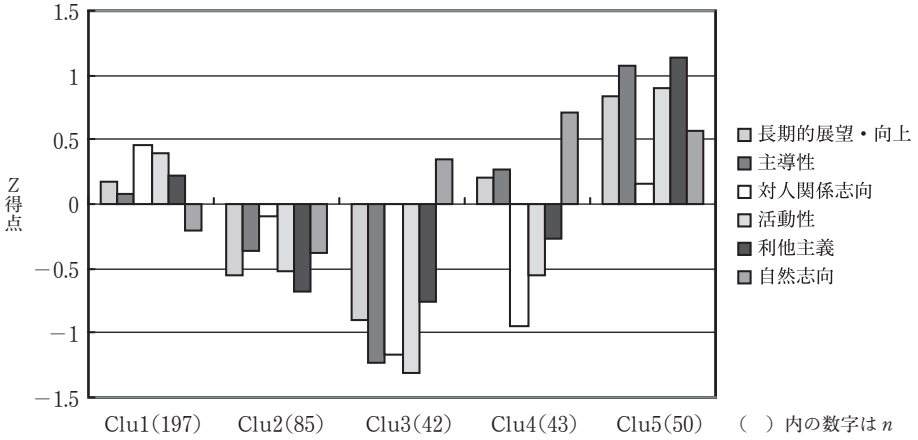

図3　各クラスターの志向性得点パターン

⑷　レジャー志向性パターンの抽出と検討

ここでは，先行研究（佐橋・佐藤 2007a）と同様の処理をして志向性のパターンを検討した。具体的には，因子分析から導き出された「対人関係志向」「主導性」「利他主義」「活動性」「自然志向」「長期的展望・向上」という6つの因子の因子得点を用いて，階層クラスター分析（Ward 法）を行なった。ここから抽出された5つのクラスターの因子得点をパターン化して図示したのが図3である。

先行研究においては，各クラスターにその特徴から「消極型」「平準型」「自己中心型」「自己啓発型」「最適型」と名前が付けられ，このセグメント間を上位に移動させるものとして余暇診断の方向性が示されている。すなわち，このセグメンテーションが異なったサンプルにおいても確認されれば，余暇診断ツールとしてのレジャー志向性尺度の有用性が確認される訳である。

そこで本研究のサンプルの特徴を見ると，第3クラスター（Clu 3）は各因子の得点が低いことから「消極型」と位置づけられる。また，各因子の得点が高くなっている第5クラスター（Clu 5）は「最適型」として捉えることができる。それから，「長期的展望・向上」あるいは「主導性」，また「自然志向」といった因子の得点が高くなっているにもかかわらず「利他主義」の得点がマイナスになっている第4クラスター（Clu 4）は「自己啓発型」と位置づけることができる。目指すものを持っているにもかかわらず他人よりもまず自分の志向に集中していると解釈できるからである。また，第1クラスター（Clu 1）は，6つのうち5つの因子に関わる得点がプラスになっていることと，さらに「利他主義」の得点がプラスになっていることから，「自己中心型」ではなく，「平準型」に位置づけられるだろう。

ただし，先行研究では「自己中心型」と名づけられたパターンは今回の調査では特徴的には現われなかった。「長期的展望・向上」が低く，言い換えれば現在を中心に考える「享楽的」傾向を持ち，「主導性」が高く人をリードする一面も持ち合わせながら，「利他主義」の得点が低いというのが「自己中心型」のプロフィールである（佐橋 2009）。

第2クラスター（Clu 2）では，「長期的展望・向上」が低くなっているものの「主導性」も高くない。また他の因子と比べると，「対人関係志向」の得点が比較的高くなっている。これらの点が「自己中心型」と位置づけるのを退ける理由である。

それでは第2クラスター（Clu 2）をどのように解釈すれば良いのだろうか。

先行研究によれば，「対人関係志向」の得点が高く「主導性因子」の得点が低い，というパター

ンを現れている（佐藤馨・佐橋由美 2007b）。これは「社交型」と解釈されているが，「対人依存的」いわば「おつきあい」で左右されるセグメントとして理解できる。

4. ま と め

今回の調査によって，「自己中心型型」と呼ばれるパターンを除けば，一般のサンプルでもレジャー志向性尺度によってレジャーに関する「到達度」のセグメンテーションがある程度可能であることがわかった。

ただ，レジャー志向性尺度の余暇診断ツールとしての有効性を検証するためには，レジャー活動やクオリティ・オブ・ライフ，生活満足度といった関連変数を組み込んだモデルとしての検討が望まれる。また，先行研究との差異をサンプル特性に基づくものと見るか，尺度の脆弱性に起因するものと見るか，明らかにするためには，さらに異なるサンプルによる検証を合わせて行なっていくことが求められるであろう。

参考文献

佐橋由美，2009，“最適な”レジャースタイルを特徴づける中核要素としての志向性概念の検討，大阪樟蔭女子大学学術研究会人間科学研究紀要第 8 号：25–37.

佐橋由美・佐藤馨，2007a，レジャー志向性尺度の開発に関する研究(2) ── 多様な大学生における調査データから志向性尺度の今後を展望する ──，レジャー・レクリエーション研究 59：52–55.

佐藤馨・佐橋由美，2007b，スポーツ活動参加促進に向けた予備的研究 ── 余暇志向性尺度の開発と志向性がスポーツ参加に繋がる可能性の検討 ──，びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第 5 号：173–185.

土屋薫，2009，レジャー志向性尺度に見られる流山市の特徴，情報と社会第 19 号：317–322.

土屋薫・茅野宏明・マーレー寛子・佐橋由美・佐藤馨，2008，レジャー・アセスメントと施策構築に関する基礎的研究，レジャー・レクリエーション研究 61：90–93.

土屋薫・木村文香・林香織，2009，学際的アプローチによる地域研究 ── 流山コミュニティモデルの構築と大学の役割 ──，江戸川大学学内共同研究報告書：1–9.